「路上観察学入門」　赤瀬川原平・南伸坊・藤森照信編　1986年刊

◀◀バブルに向かう街で

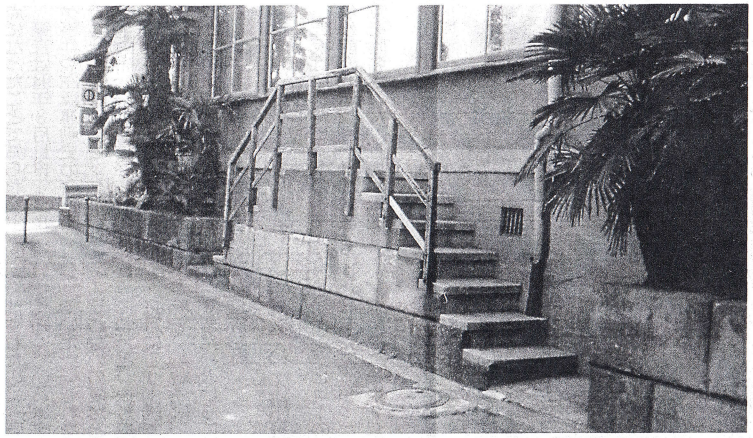
開発のはざまに　いとしい風景

はじめに階段があった。

1972年のある日、作家、画家の赤瀬川原平氏らは東京・四谷の旅館の壁面に残された、もはや階段としての機能を果たしていない階段を発見した。上って、ただ下りるだけ。編集者の松田哲夫氏、イラストレーターの南伸坊氏とともに「純粋階段」と名付け、通るところがふさがれて意味のなくなった「無用門」などとあわせて「超芸術トマソン」と分類し、鑑賞の対象とした。

その定義は「不動産に付着していて美しく保存されている無用の長物」（『超芸術トマソン』より）。読売巨人軍に鳴り物入りで入団したものの豪快な三振は「扇風機」にたとえられた、気の毒なプロ野球（元メジャー）選手の名前にちなんで命名された。

一方、建築家で建築史家の藤森照信氏は、関東大震災後の復興期に現れた表だけ洋風の外観で後部は木造の「看板建築」など、それまでほとんど手つかずだった近代以降の建物のフィールドワークで成果をあげ、「建築探偵」の異名をとった。編集者松田氏の仲介で赤瀬川氏と出会い、共鳴する。ほかに荒俣宏、四方田犬彦、杉浦日向子の各氏らが参加して1986年に設立したのが「路上観察学会」だ。



東京・四谷の純粋階段
＝路上観察学会・赤瀬川原平氏撮影

ベネチアでは2006年にも路上観察がとりあげられていた。ビエンナーレを前に会見する（左から）藤森照信、赤瀬川原平、南伸坊、松田哲夫、林丈二の各氏

2014年ベネチア・ビエンナーレの会場風景＝本橋仁氏提供

興味のおもむくままに街の事物を観察、記録し、学問的、芸術的評価を意識せず、商業的成功もさほど欲しない。ただ楽しいから続けるという学会員の中で、とりわけ異彩を放つのがデザイナーでイラストレーターの林丈二氏だ。マンホールの蓋の観察が有名だが、欧州各都市や中南米に滞在したときにはホテルのカギの形状からハンガーの数、洗面台の排水の渦の向きを記録するなど関心の対象は森羅万象に及び、学会員から「神」と呼ばれた。赤瀬川氏は「宇宙人がもし地球に着陸したら林さんと同じことをする」（『路上観察学入門』より）と喝破した。

バブルに向けて東京は大規模開発が進んでいた。学会の事務局長、松田氏は振り返る。

「路上で地上げ屋と勘違いされることがあった。人間の暮らしの痕跡が残るところ、開発の手の入っていないところに行くので、行動範囲が重なる。向こうは怪しく見られないように背広姿だから、僕たちのほうが怪しい。彼らの関心は未来に向かい、僕たちは過去に向かっていた」

やがて景気が下向くにつれ開発は勢いを失った。だが路上観察学は新たな展開を見せる。まず山形、香川、埼玉など各自治体やJR、国と連携し、各地でフィールドワークが行われた。ノンフィクション作家で学会事務局の前田和男氏(74)は「地域おこしブームとの連動もあったでしょう。もともと路上観察は都会の楽しみといった側面があり赤瀬川さんは当初懐疑的でしたが、やってみるとおもしろかった」。

活動は国境も超えた。本は中国、台湾で翻訳された。香港では現代美術を扱うキュレーターから、路上観察学会の巡回展で使った展示品の一部を購入したいとの引き合いがあった。前田氏は「香港も北京も上海の人も急速な開発による喪失感があるのかもしれない」と話した。

欧州はどうか。京都国立近代美術館の特定研究員、本橋仁氏(39)はイタリアで2年に1度開かれるベネチア・ビエンナーレ国際建築展に2014年に参加。70年代の日本の建築家と建築史家を主題にした展示で、路上観察学会の活動も紹介した。その後、カナダなどでも関連した企画展示が行われたという。

本橋氏は、海外の関心が絶えない背景に東京の特殊性があるとみる。「建築探偵」も「超芸術トマソン」も、それぞれ開発による「破壊」の時代に活動が進んだ。「東京は破壊と創造がせめぎあう世界でも珍しい都市。看板建築は、わずか半世紀前のものを再評価していた。トマソンも当時発見されたものは大半が失われましたが、破壊と創造の中で、常に新たなトマソンが生まれては消えているのではないでしょうか」と話す。

かわりゆく世の中で失われつつある何げないものを慈しむ心、それは古来私たちが大事にしてきた一期一会の精神につながる……、かどうかは知らない。

（小林伸行）

路上観察学入門（ちくま文庫）

■メモ　路上観察学の記録や、その精神を語り合う座談会などを収録。単行本は86年刊行で累計3万部。文庫版は93年刊行で現在累計4万6千部。台湾（繁体字版）では6千部、中国（簡体字版）では5千部が発行された（数字は筑摩書房しらべ）。

時代の栞
TOKI NO SHIORI

道草の楽しさ　気づく人増えた

デザイナー、イラストレーター　林 丈二さん(73)

幼稚園の頃から通園通学はバスや電車で、車窓からおもしろいものを常に探していました。小学1年のとき、石垣の苔を採取するおじさんをバスの中から発見し、苔のように目立たないものでも楽しめることを知りました。高学年になると同級生の誕生日や趣味、好きなスポーツ選手などを聞いて記録を作ったりしていましたね。

中学以降は受験勉強が大変で、その気になれず、ぼんやりしていた。自分には何か足りないように感じてもいました。大学はロックアウトで授業はないし、バイクの免許を取って日本一周しました。ほとんど人に会わず、99%野宿。13回転倒して全身傷だらけ。でも、何の根拠もなく自信がついた。日本ってこんな感じかと。観察が再開するのはそれからです。

日常の風景から少し光を放つものに気づいて立ち止まる。路上観察は道草の楽しさです。街歩きでも映画や小説の中でも「オヤ」と輝くものは細部に宿るのです。

本が出たころは多くの人が道草をしませんでした。しかし今はスマホで簡単に写真が撮れるしSNSもある。路上観察が当たり前になった印象です。会社や家庭に縛られず自由な人生を求める人が増えたのとも連動しているような……。つまり僕のような人が増えたわけです。それはそれでいいのかなあとも感じます。先々危ないですよ。生産性はありませんから。

◇次回は『八甲田山　死の彷徨』の予定です。